

ハワードの田園都市思想と都市形成の変遷 —イギリス・レッチワースを例として—

堀江興*

(平成13年10月31日 受理)

Thought of Garden City of Howard and History of Urban Planning Development —Example of Letchworth in England—

Koh HORIE*

The world famous beautiful small town named Letchworth is located in the outskirts of Capital London.

This town was formulated by the proposal of Ebenezer Howard in 1898. He hoped to create the new middle town near London. He had always an interest in urban problems in London. Because London had much public nuisance city caused by the over population, many poor inhabitants, narrow streets, traffic congestion, low-level housing estates and various diseases under the Industrial Revolution.

He worked in the small village of Nebraska and Chicago in the US. He was moved by the environmental residential district of Chicago.

After return to London, He published his own book titled Tomorrow : A Peaceful Path to Real Reform in 1898. He established "the Garden Association" in 1899, he re-published a book named "Garden City of Tomorrow" in 1902.

He bought the rural village Letchworth, and he appointed two architects Barry Parker and Raymond Unwin. Many peoples co-operated the construction and establishment of new town Letchworth.

This Letchworth "Garden City" was realised and is under the management of Letchworth Garden City Heritage Foundation.

We can now see many small or middle new town developed under the idea of Garden City of Howard in England, Japan, France, United-States and another countries.

Key words: Ebenezer Howard, Garden City, Letchworth

1. はじめに

イギリスの首都ロンドンの北56kmの自然景観に恵まれたなだらかな丘陵地に、人口3万人の世界的に有名な美しい都市がある。その都市の名はレッチワース(Letchworth)。1898年、独学で長い期間都市問題を勉強していたロンドンの一市民エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard)が「明日：真の改革への平和な道(Tomorrow: A Peaceful Real Reform)」と名付けた本を著し、田園都市(Garden City)づくりを提唱し、彼の思想を具現化させたのが、このレッチワースである。いわば現代住宅都市計画の源流に位置づけられる記念碑的都市であり、今日までイギリス国内はもとより、日本やフランス、ドイツ、フィンランド、アメリカなどの世界の都市計画家に都市づくりの一つのあり方を教示し、大きな影響を与えたことははかり知れないものがある。このことから2001年9月、日本では筑波と神戸でシンポジウムが開催されたが、2002年8月には、英国レッチワースで同様なシンポジウムが開催される予定で

* 建築学科 教授

ある。

筆者はこのシンポジウムに先んじて、2001 年 5 月、現地を広く調査し、資料収集に努め、レッチワース田園都市遺産財団(Letchworth Garden City Heritage Foundation)のステュアート・ケニー理事長(Director General, Stuart Kenny)へのヒアリングを 1 時間半にわたり実施した。あわせてフランス・パリ周辺のニュータウンの実情と課題を調査研究した。その結果、新しく得た知見を含め、ここに全体の研究紹介と評価をするものである。

2. 田園都市(Garden City)論の背景

イギリスは、18 世紀に発明された紡織機によって産業革命がもたらされ、農業に従事していた数多くの人々が、新しい職を求めて「世界の工場」と化したロンドンやマンチェスター、バーミンガムなどの都市に流入し、このことがロンドンなどの都市事情を著しく悪化させることとなった。イギリスは「ビクトリア時代」と呼ばれる世界の繁栄を謳歌していたのである。1901 年のロンドンの人口は 660 万人に達しており、「大英帝国」は名声を欲しいままに海外諸国都市のいっそうの植民地化政策を進めると共に、ロンドンの世界における経済優位性を高め国内外ともゆるぎないものであった。

ロンドンの首都機能の一極集中化は高まり、都市の肥大化は著しかった。この中でも人間の住む都市環境は過密で劣悪な状態であった。とりわけ冬期には、住宅の煙突から排出されるストーブ暖房用の石炭の煙や、名物の深い霧に加え、路上には旅客用馬車の馬糞が散乱している状態であった。

さらにロンドン市民の飲料水は、汚濁されたテムズ川からのものであり悪臭甚だしく、高層階に住む人は排泄物を上から投げ捨てることが多いという生活習慣状況であった。当然衛生環境は劣悪であり肺結核やコレラなどの伝染病も多かった。ロンドンは余りにも多くの、早急に解決することが困難な都市問題を抱えていたのである。

この劣悪な都市環境の問題解決が極めて困難であることを見抜き、新しい発想で、人間にとって健全な都市生活環境をロンドンの郊外に創造しようと考えた人が、エベネザー・ハワードである。

3. エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard 1850 年～1928 年)の人間像

エベネザー・ハワードは 1850 年 1 月、ロンドンのシティで生まれた。父親はパン製造業と菓子屋を営み、母親は農家出身という、中産階級の中でも「中の下」という家庭であったが、ロンドンに近接した田園地帯にあった学校で学んでいる。しかし、14 才までは初等・中等教育を受けることができたが、それ以上の高等教育はイギリスの社会的差別から進学することが出来なかった。15 才の時、父親の紹介でシティの株式仲介人の事務員として働くかたわら、実業学校でピットマン式速記法を習得し、弁護士事務所や教会でも働いたりしたが、この速記技術が後年彼の人生を自ら大きく拓くこととなった。彼は元来病弱で、性格的にも人

を排除し押しのけて上に立っていくのが苦手であったが「努力の人」だったのである。

彼は6年間仕事をした後、21才の時友人と二人でアメリカ中央部のネブラスカ州へ移住することとなった。その理由は当時のアメリカの法律で、一定期間、土地の開墾と農業に従事した者には、その土地が与えられていたことに拠る。彼はロンドンの劣悪な生活環境を嫌い、医師の助言もあったことから、このアメリカの法制度特典に強い関心を持ち、心機一転をはかったものと考えられる。

ネブラスカ州ではジャガイモとトウモロコシの栽培を始めたが彼の畑は不作で、逆に友人に雇われることとなったが、農業で成功することに見切りをつけ、1872年シカゴに出て、速記の技術を見込まれた会社に採用されている。当時のシカゴはガーデンシティと呼ばれるところがあったが、1871年10月に起こった、2日間にわたる大火で300人が死亡し、10万人が焼け出され、1万8000戸以上の建物が焼失した大火により復興が進められている時期であった。大火による市内の復興計画のためにフランク・ロイド・ライトをはじめとした建築家や土木技師が協力して「シカゴは甦る」を合言葉に、新しい都市デザインによる再建が進められていたほか、郊外では、川沿いに緑の豊富な良質な住宅が建てられていた。

おそらくハワードは幼少の学令期にロンドンの緑の多い郊外で学んだ自然環境が潜在的記憶に残り、ここシカゴの優れた住宅環境にも目を見張る思いがあったと考えられる。加えて彼は公衆衛生の視点からの都市計画のあり方を書いた書籍に親しんだり、イギリス叙事詩にも親しみ、彼の心の機微に触れる事柄が多々であったと思われる。本質的には彼は一種のロマンチストであったと考えられる。

これらの積み重ねられてきた知識や経験から、彼は都市を新しい土地で作り出すことが可能であること、農業と都市には連鎖的有機性があり、個々が切り離された存在ではないこと、そのためには具体的成果を生み出すことが大切であることを会得したと考えられる。

しかし、アメリカでの仕事はここまでで、1876年彼が26才の時ホームシックのためにイギリスに帰国している。当時のイギリス経済は一転して不況の状態にあり、ロンドンではさらなる人口増加、失業者の増大、スラム化とスプロール化、交通事情の悪化等により都市問題は深刻の度を強めていた。

彼は帰国後、速記術の腕を買われロンドンの議会の審議記録を作成する会社に職を得ている。彼は様々な中産階級に属する市民運動家による勉強会に入って著名思想家の演説を聞いたり、交遊を深める一方、独学で都市問題を習得したりもした。この時期彼はフェビアン協会の会合で、後年名を成すジョージ・バーナード・ショーを知ることとなったが、ショー自身はこの時は初老にみえたハワードを見下し、まったく評価しなかった。後年ショーは、ハワードを心底から評価し、ハワードが死んだ時は深く悼んでいる (Fig. 1)。

ハワードが大きな転機を迎えることになったのは、アメリカの社会主義者のエドワード・ベラミーが1888年に著した小説「顧みれば」という本を、アメリカの友人から贈られたことに端を発している。これはアメリカの青年が112年後の西暦2000年にボストンを訪

れるという夢想小説であった。この小説は 2000 年のボストン社会が効率的によく管理された都市として描かれており、合理的に予め都市計画され、厳格に運営される社会を描き、都市の土地の増価格分は地域社会へ完全に還元されるという内容であった。ハワードは感激し、ロンドン中心街の醜悪な実態との格差に深く複雑な思いがした^{1)~2)}。

それから苦節 10 年、50 才台近くのハワードは自己の改革論の「マスターキー」という考えに到達した³⁾。その思考の根底には、社会問題は個々にとらえて考えるのではなく、社会全体の協力と友愛の精神に満ちたものに平和的に改革されるべきであるというものである。しかし、ハワードは一介の無名の速記技術者に過ぎず、雑誌への投稿も採用もされず、出版は難航した。しかしこの苦境を知ったアメリカの友人が、一部資金を融資したことにより、1898 年 10 月、本論文の冒頭に述べた「明日：真の改革への平和なる道」と題して、3000 部を自費出版した。しかし、この出版物は評価されず、タイムズをはじめとしたマスコミ紙の評価も厳しく、夢想家の戯言として片付けられている。結局ハワードは 4 年後の 1902 年「明日の田園都市(Garden Cities of Tomorrow)」と題して改訂本を出した。これが今日多くの人によって評価されている名著である(Fig. 2)。



Fig.1 Ebenezer Howard (1850-1928)



Fig.2 re-issue of Howard's book in 1902

4. 田園都市(Garden Cities)のコンセプト

4.1 全体論

「明日の田園都市」は、全 13 章から構成されている。その主張は、大都市への人口流入防止と田園地域の衰退にかかわる問題をどのように解決するかということであった。ハワードは、人が何故、田園地域から都市へ移動するのかという命題に着目し、主因は都市の高賃

金, 多くの雇用機会, 多様な娯楽性に魅力を感じて多くの人が感じるためであるとし, 一方の田園地域には自然美, 新鮮な空気, 低家賃という都市にはない魅力があるではないかと分析している。

そこで, ハワードは人間が住むところは, これらの二者択一にあるのではなく, 両者の利点を兼ね備えた第三の選択肢があるはずで, 都市的生活と田園地域が組み合わせられ結合(結婚)させたものこそが「田園都市」であると主張した。

ハワードはこれを三つの磁石にたとえてあてはめ, 説明している。すなわちFig. 3にみるように, 都市と田園(地域)を対置させ, 双方の長所と短所を図上でキーワードをもって示している。これらは必ずしも系統的, 体系的によく整理されて配置されたものではなく, 思いつくままに羅列された感があると見られるが, ハワードの言わんとすることは理解できる。

この二つの磁石に向き合う形で「人々」を真ん中に据え「都市—田園地域」の磁石を配置し, この磁石こそ, 都市と田園地域両者の魅力をあわせ持つと共に, 両者のデメリットを解消するものであるとしている。

4.2 具体的田園都市構想

ハワードが1898年に提唱した田園都市構想は, スラム街がなく(工場やアパートから排出される)煤煙もない社会都市を想定している。Fig. 4はそのイメージ図である。すなわち半径約1マイル(約1.6km)の母都市を中心として, 半径約2.5マイル(約4.0km)の範囲内に6つの小都市(半径約1/3マイル約500m)を衛星状に配置したものである。ハワードは母都市をリング状にとりまく運河, 円弧状の地方都市鉄道, 母都市周囲や各衛星都市を結ぶ運河, 中心母都市から放射状に延びる幹線道路(ブルバール)の模式図を示している。さらにこれらの圏域の外周をとりまく牧場, 農耕地, 果樹園などからなるグリーンベルト, その中を走る幹線鉄道, ブールバールと接続する地方道路を模式的に示している(Fig. 5)。

このイメージ図のうち母都市にあたる部分をさらに仔細に見ると, Fig. 6に示すように中心部は花壇をとりまくように市役所, 中央公園, 博物館, 美術館, 病院, 図書館, 映画館, コンサートホールを配置している。これらの施設の周囲は, 家並みや庭園を円弧状に配置し, 水晶宮と名付けた展示会場やショッピングセンターの他, ゆったりとした広幅員の道路に近接して教会や学校を配置している。

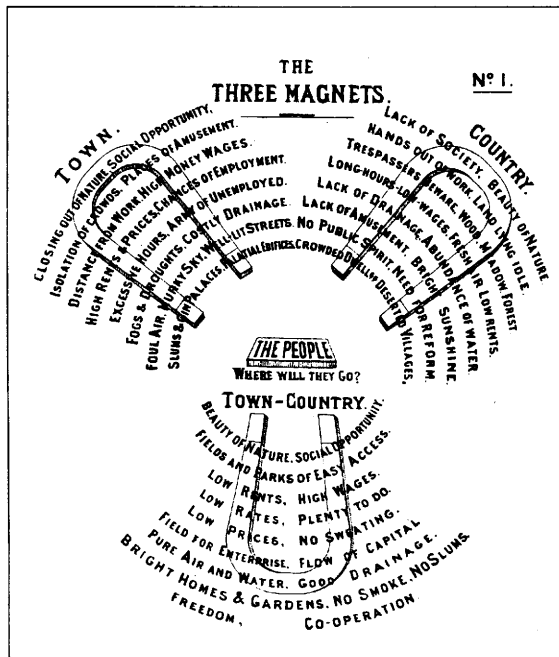


Fig.3 The "Three Magnets" of Howard's concept

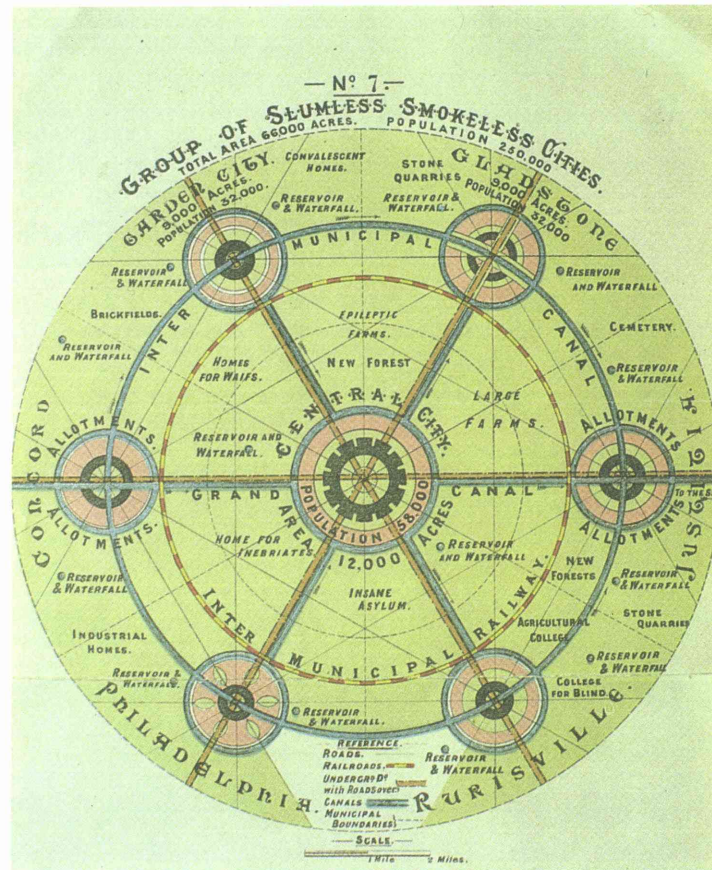


Fig.4 The Social City. The Final version from Howard's
To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform, 1898

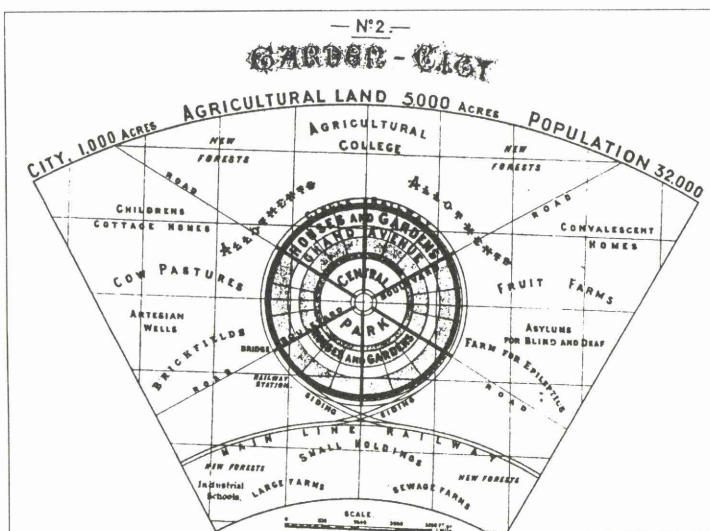


Fig.5 The Garden City in its agricultural belt

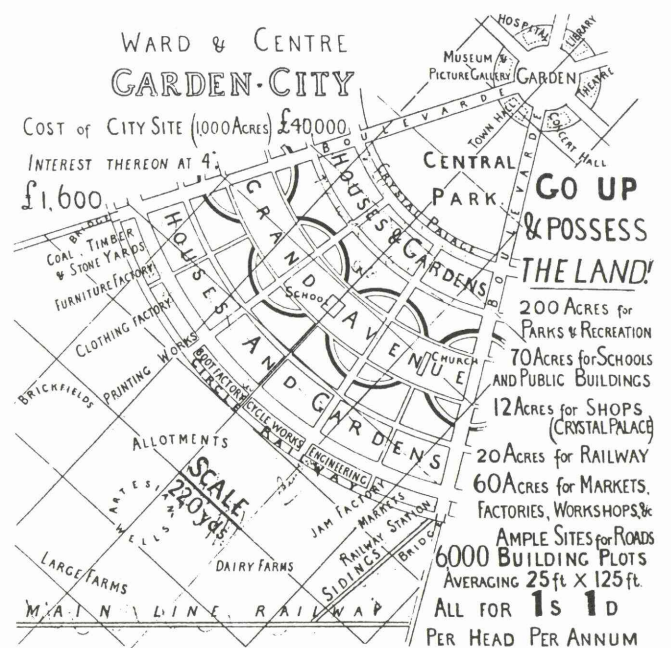


Fig.6 Howard's sketch diagram
"Ward and Center"

ハワードはこの母都市を小規模な田園都市として位置づけ、生活、就学、娯楽等の施設が完備した、いわゆる今日の我々がいうコンパクトシティ的なものにするのを考えた。

ハワードの田園都市構想の規模は次の通りである。

- 面積：1,000 エーカー(405 ヘクタール)(市街地部)
5,000 エーカー(2,025 ヘクタール)(外周永久農耕地)
- 人口：3 万人(市街地)
2 千人(農耕地)
計 3 万 2 千人
- 住宅区画：5,500 区画。
1 区画の大きさはおおむね 20 フィート×130 フィート(約 73 坪)
- 土地の所有形態：個人の土地の所有は認めず、計画の徹底を保持するために新しく設立する田園都市株式会社が永久所有
- 土地の購入費：田園都市建設の理想を持つ有志が購入する社債(利率 4%、償還期間 30 年)で一括購入
- 運営：土地は入居者に賃貸する形式をとり、会社は地代を徴収し収入とする。
また市民の日常経済生活を維持するに足るだけの工業を誘致する。
- 上下水道・ガス・電気・鉄道は都市専用物とする。
- その他：一つの田園都市が計画人口に達した時点で、少し隔った所に第二の田園都市を建設し相互を鉄道で結び、母都市を中心とした複数の田園都市による都市圏を構成する。

5. 田園都市構想の具体化

ハワードは、この田園都市構想を実現するため、本を出版した翌 1899 年、「田園都市協会」を設立した。ハワードは、この協会を発展させるために、当時勇名をはせていた、やり手の自由党代議士、ラルフ・ネビルを説得し会長に迎え、ジャーナリスト出身のトーマス・アダム(後年、アメリカハーバード大学都市計画学科の創設教授)を事務局長に据え、さまざまな分野の人達 1,500 人程度による第 1 回協会設立大会を開催した。これだけの規模の人たちを集めたことは、ハワード自身にパワーが備わって来たことを物語るものである。これらの集まった賛同者の中には、後年実際にハワードに協力し田園都市計画を立案することとなった、バリー・パーカーとレイモンド・アンウィン 2 人の若手建築家も参加している。

1901 年 12 月から、ハワード達は目標額 8 万ポンドの基金集めをするかたわら、翌 1902 年「第一田園都市開発会社」を設立、1903 年夏には候補地として数案の中からロンドンの北レッチワースを適地として、15 万 8000 ポンドで選定購入した。ここは、わずかな人口の農村村落土地 3,018 エーカー(1,221 ヘクタール)の規模であったが、これは当初の計画目標 6,000 エーカー(2,430 ヘクタール)の約半分に相当するものにしか過ぎないものだった。な

お、会社名は1903年9月「第一田園都市会社」に変更している。

この購入した敷地をガーデンシティとして計画設計するため、1904年2月バリー・パーカー（1867年～1947年）およびレイモンド・アンウィン（1863年～1940年）の2人の建築家（Fig. 7, Fig. 8）の案がコンペで指名された。

1904年4月アンウィンの計画案が発表された。これは1666年に起こったロンドン大火の復興計画をクリストファー・レン（Christopher Wren）が手がけたものにヒントを得たといわれている。

全体計画は、ゆるやかな丘陵地にアメニティの豊かな広幅員道路、ロンドンと結ばれる鉄道施設、レッチワースの中心部街区、公会堂、博物館、学校、宗教施設、ホテル、オープンスペース、緑地、公園、郵便局、市役所を配置するものであった（Fig. 9）。ここレッチワースでは土地利用計画は用途区分を明確にしており低密度なものに計画している。住宅設計は地域の伝統と來たるべき新しい時代へのデザインを折り込むなどの工夫がなされた。一方、レッチワースでは印刷、木工の企業が工業地に計画的に立地されている。

これらの計画は遂一事業化されていったが、1905年にはロンドンからの大量の雇用労働者が、これらの建設工事にたずさわった。



Fig.7 Barry Parker (1867-1947)



Fig.8 Raymond Unwin (1863-1940)

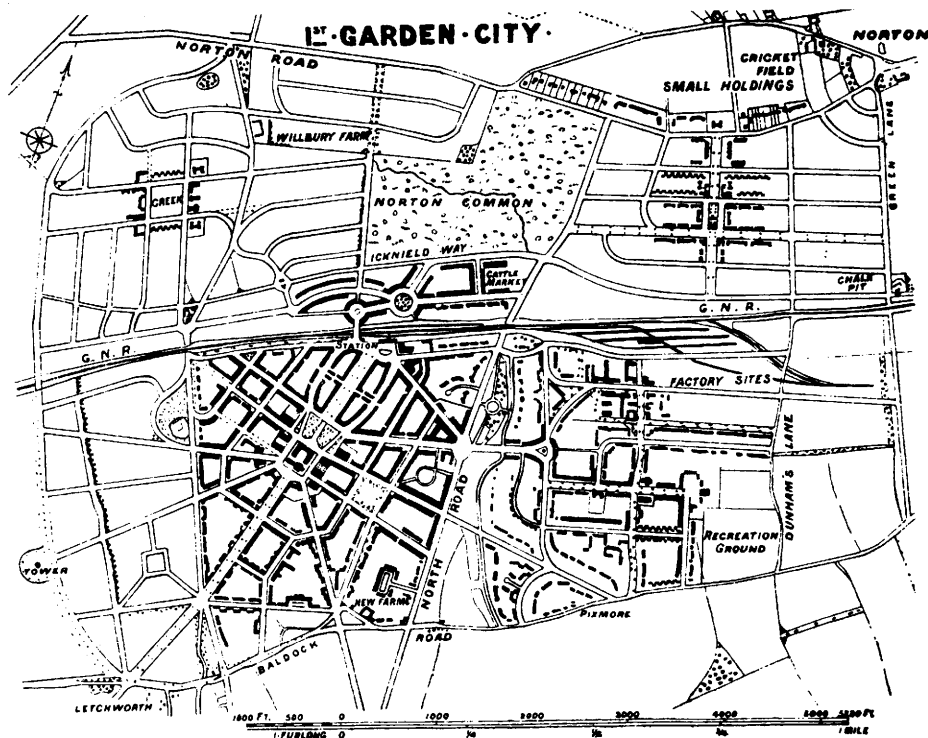


Fig.9 The Garden City Layout Plan in 1904

しかしながら、これらの工事が徐々に完成されても当初は好んでこの土地に住もうとする人は少なかった。その理由は、当時としてはロンドンから遠かったことや販売価格の高さにあった。中産階級以上でないと経済的に住めなかったが、ロンドンよりも環境の優れたこの地が次第に評価され、住む人も増加し始めた。

一方「田園都市」思想の一つでもあった日常生活の「自給自足」に必要な給与収入を支える工業誘致と生産体制、労働者の雇用が進まず、このため会社は10年間配当ゼロの経営を余儀なくされたりもした。

またあらゆる面で資金不足が顕在化していた。その理由はインフラ等整備投資計画に甘さがあったことによる。さらに住民が支払うべき借地料は当初5年毎に見直す方式を改め、99年間固定したことなども大きく影響している（これらの問題は徐々に解決がはかれたが長く尾を引き、ハワードが1928年5月78才で死去した時も会社の負債は残っていた。この99年という設定には、今も厳しい意見がある）。

一方、ハワードに協力してきたラルフ・ネビルやトーマス・アダムス、レイモンド・アンウィンも1910年までにはレッチワースの仕事から手を引いている。とりわけ建築家レイモンド・アンウィンとは計画面の考え方でハワードと意見が合わず、アンウィンの独断的進め方もあり、ハワードが本人を仕事から手を引かせたと伝えられている。

その後もレッチワースの都市づくりは思いがけない苦難に見舞われている。その1つは、第二次大戦後のアトリー労働党内閣が、ニュータウン法を1946年制定し、ニュータウンの開

発利益を国有化するために 1947 年都市・田園計画法を改正したことにある⁴⁾⁵⁾。

もともと「田園都市」思想は「共同的」利益還元を基盤としているため、国がいう「公共的」還元の思想とは相対立するものであるため、「田園都市」にとって財政的仕組みが変わってしまうというものである。迂余曲折を経て国有化は見送られ、さらに 1954 年、保守党政権の時代に開発利益の国有化は廃止されている。

さらにレッチワース乗っ取り事件が起こっている。1960 年 9 月株を買い占めた「ラグラン不動産信託会社」が大株主として現れ、町議会、株主、レッチワース・シビック・トラストと厳しい対立をすることとなった。1960 年 11 月さらに奇怪な「ホテル・ヨーク会社」が現れ、株の買い占めを開始し三つ巴の争いとなった。この問題は国会論争に持ち込まれ、1962 年 8 月「レッチワース田園都市開発公社法」が成立し、公社の全資産は公共的信託である公共団体の開発公社に収用されることで決着がついている。

しかし、レッチワースの住民達は町の運営が行政によって行われることを嫌い、結局 1995 年 5 月レッチワースを総括する慈善的管理団体として「レッチワース財団」(現、「レッチワース田園都市遺産財団」)がつくられた。ただし役員は財団の性格上無報酬とされている。現在の理事長は 1994 年 11 月以降今日まで、スチュアート・ケニー(Stuart Kenny)がその職を務めている(Fig. 10)。スチュアート・ケニー氏は本稿「1. はじめ」で述べた氏であり、理事長室における彼の当筆者に対する説明は適切であった。



Fig.10 Mr. Stuart Kenny.
Director General,
Letchworth Garden
City Heritage Foundation

6. レッチワースの現在状況

レッチワースの町もこの 1 世紀の間、存亡の危機を克服し今日に至っている。今日の主な課題をここに挙げる。

まずレッチワースは全体として統合性が不足しているという現実がある。また町周辺の農耕地からの作物は品質が劣り価格も高く、しかも物資の流通システムが国内で完備しているため、レッチワースの住民は他地域で生産された作物を日常攝取しており「自給自足」体制にはない。つまり、当初のハウードの思想通りとはなっていない。

さらに一時期レッチワースの中心市街地の衰退がいちじるしく、1994 当時全店舗の 20% が閉店状態にあった。この解決のために、3 ヶ月の時間を要したが、郊外型店舗が増えていく状況の中で、あえてスーパーマーケットを中心部につくることにした。その一つの経営戦略として、買物客には 3 時間の自動車駐車料金無料政策をとり成功した。これにより現在毎月 3

万人の顧客がある。

加えて一部の店舗の2階部分は、英国人の好むバーにつくり替える改造も進めると共に、中心部の事務所ビルは、かなりの費用を投じてIT化のための設備更新を遂行した。

次に市民の娯楽を満足させるために、3面のスクリーンを持つ映画館をつくることとした。

レッチワースは元来自動車時代に対応する都市ではなかったもので、市民の交通安全をはかるために多くの歩道を設置すると共に、郊外のグリーンウェイには2003年を目途に乗馬道やサイクリングロードの整備を進めることを予定している。

レッチワースには家賃の安い低層の公営住宅がつくられてきているが、今後この建設をさらに行うか否かが今大きな課題となっている。

しかしながら、このレッチワースには創建時からの人達の子孫が多く住んでおり、住みよいまちとして、三世代以上にわたる住民達は、今のレッチワースの日常生活状態に満足している状況にある。Fig. 11に現在のレッチワースの都市整備状況を示す。

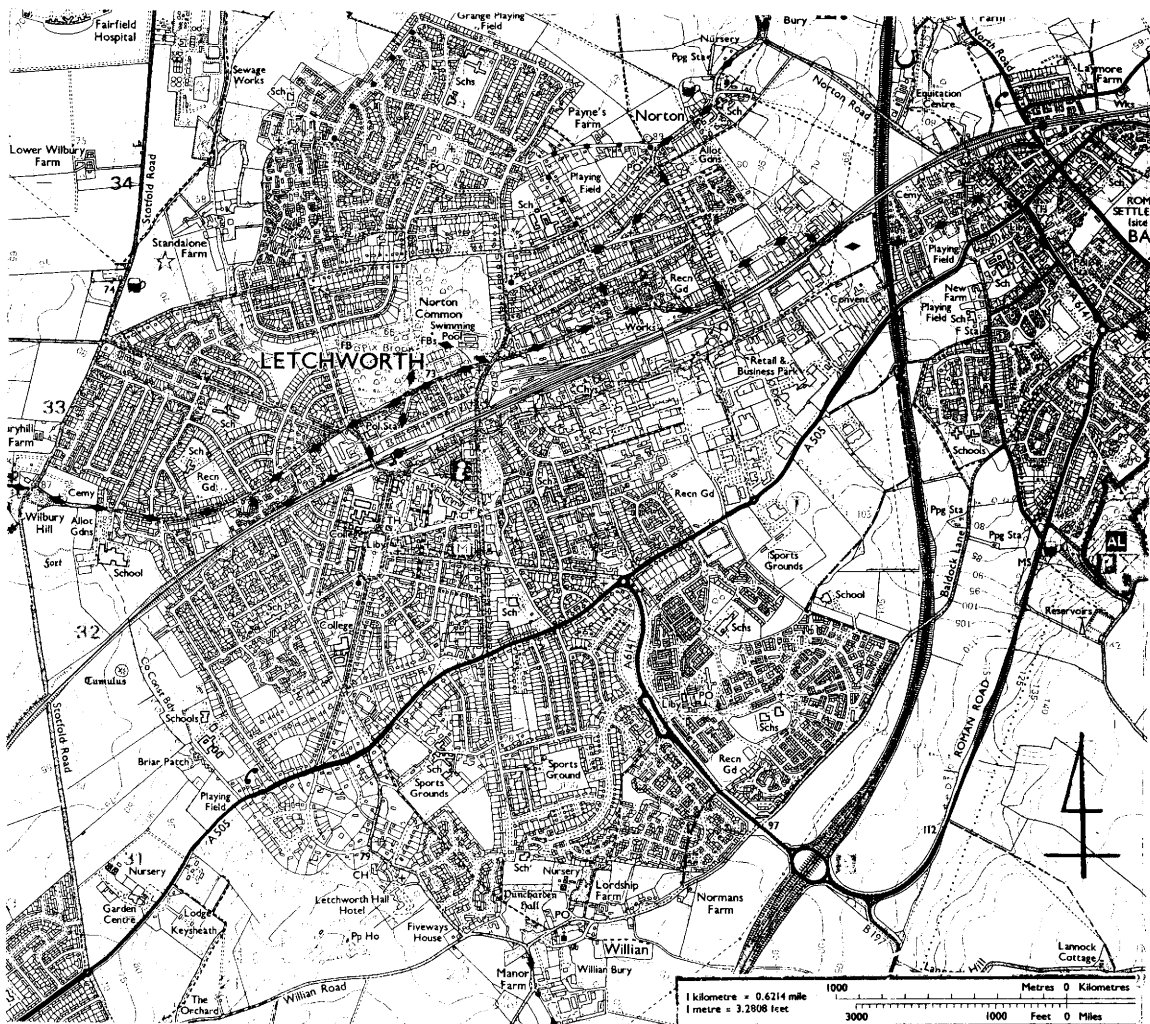


Fig.11 Actual Circumstances of Letchworth

7. レッチワースのデザイン指針

レッチワースの特徴の一つに、タウン全体の景観創出や保護を守りつづけることを挙げることができる。前述したようにレッチワースは、平坦あるいはゆるやかな起伏に富んだ地形を成しており、この自然を活かしながら「輝かしい未来」をめざしたタウンづくりは今も重要である。このためレッチワース財団は、レッチワース田園都市の住居とこれを取りまく環境について、デザイン指針を細かく定めている。

この指針は 20 ページにわたるもので、主として建築材料と形状、屋根やタイルの形態、材質、煙突の様式、ドアや窓枠の形、ポーチ、自動車駐車場、コンクリート製構造物、色調、住宅前庭・フェン

ス・桓、美観、樹形、視覚卓越性、パラボラアンテナの設置等について、代表的な良い事例をカラー写真や図解を交え解りやすく示している⁹⁾。非常に明確なことは、如何なる場合も、素材にプラスチック製品を使うことが厳禁されていることである。なお、このデザイン指針に沿ってつくられる場合には、財団から助成金が交付される途が開かれている。

レッチワースは長い間、白色を基調としたものが伝統的に受け継がれてきている。ここではハワードが選択した白を主体としたデザインすべてが最も秀逸とされてきており、パーカーとアンウィンの思想を反映した家屋のデッサンとその建築例を示す(Fig. 12, Fig. 13)。

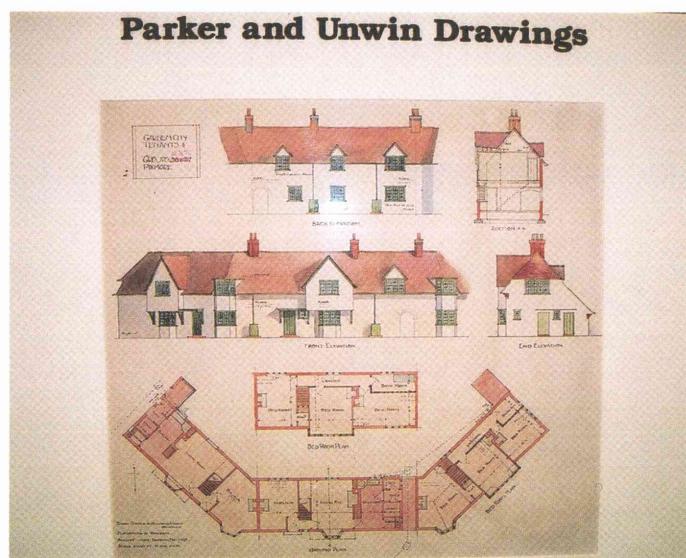


Fig.12 Parker and Unwin Drawings



Fig.13 facade of residence (Letchwoeth) (photographed by HORIE)

しかしながら家主の中にはデザイン指針を守ることを嫌うケースもあり、財団は時間をかけて指針を順守するよう説得しなければならないことが往々にしてある。またもし住宅をビジネスワークに使う場合には、財団の細かい質問状に答えて許可を得なければならないことになっている。

今日の大きな問題は、多くの住民が住宅前庭を自動車駐車場につくりかえるために、前庭の緑がいちじるしく消失してきており、全体空間構成がゆがみ、快適性が損なわれているところが部分的にあるとされている。

8. レッチワース田園都市の波及効果

ハワードの理念にもとづくレッチワースの都市づくりは、イギリス国内はもとより海外にも広められることとなった。

①まずイギリス国内の場合は、ロンドンからレッチワース方向約32km離れた場所に位置するウエルウィン(Welwyn)に第二の田園都市がつけられた。ウエルウィン田園都市をつくるために、1920年5月新会社が設立された。この新都市は人口4〜5万人を想定して、2400エーカーの敷地を生まれ変わらせたもので、ハワードの思想はここでも活きている(Fig. 14)。このウエルウィンのグランドデザインは1920年6月、イギリス王立美術学校の建築学科教授カナダ生まれフランス人ルイ・ド・ソアソンによってなされた。現在ウエルウィンは完成の域にある。ウエルウィン駅前にはハワードセンターと名付けられた2層の明るいショッピングアーケードがあり、駅前から一直線に延びる幹線道路を中心として、Fig. 15に見られるように芝生、噴水、散歩道、ほどよく剪定された樹々が並び、極めて快適な感じを生み出している。レッチワース第一田園都市の創始者であるエベネザー・ハワードも、この第二の田園都市を好み、1928年5月この地で死去している。

その後1946年8月の「ニュータウン法」の施行により、イギリス国内全土に数多くのニュータウンがつけられ今日に至っている。

②外国においては、フランス、ドイツ、フィンランド、アメリカ等にハワードの思想にもとづいた住宅主体の都市がつけられてきている。



Fig.14 Town Plan of Welwyn Garden City

本稿では東京及びフランス・パリ郊外の代表的例を述べる。

(1) 日本

日本にイギリスの田園都市が紹介されたのは 20 世紀初期のことである。

この思想を具体化させたものに東京都大田区内の東急田園調布駅一帯をあげることができる。1918 年渋沢栄一が田園都市株式会社を設立し、1923 年多摩川台地区となっていた現在の田園調布地区約 10.6 ヘクタールを宅地造成して分譲したものである。この田園調布は駅を中心として放射線と同心円状の幹線道路を組み合わせる敷地割りを行ったもので、東京でも有数の高級住宅地となっている。

(2) フランス

フランスの場合、首都パリの都市問題は、単にパリ市のみについて考えるのではなく、パリ市を包含するパリ圏域を対象として政策が進められてきている。

このパリ圏は、Fig. 16



Fig.15 Vista of Welwyn (photographed by HORIE)

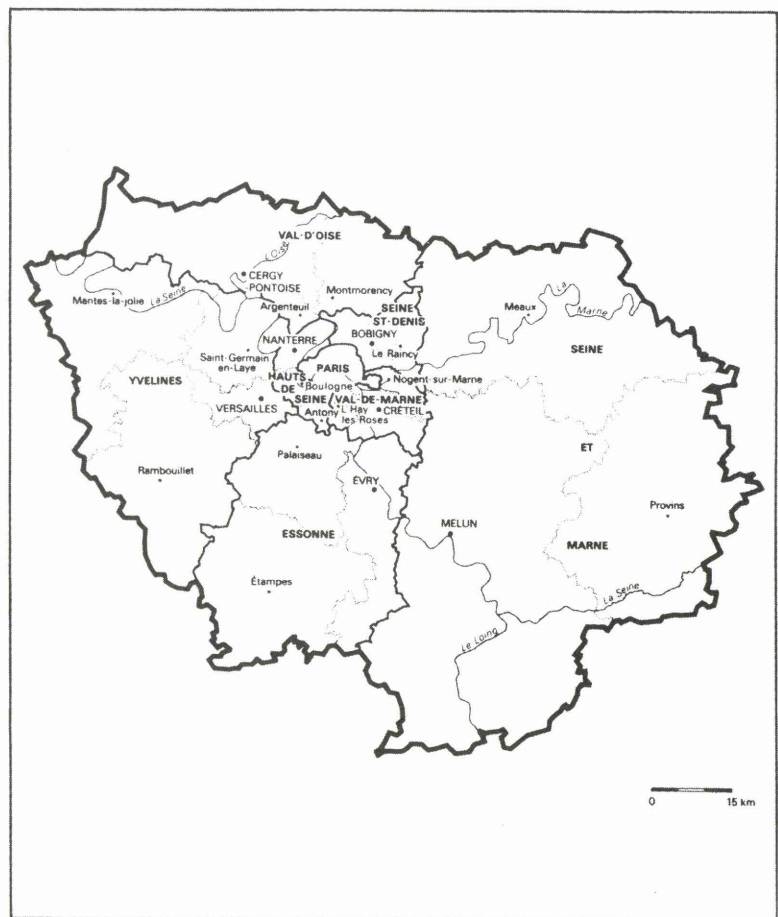


Fig.16 La Région Parisienne

に見られるようにパリを中心として周辺県すなわちイブリンヌ (Yvelines), ヴァルドワーズ (Val-d' Oise), オードゥーセーヌ (Hauts-de-Seine), セーヌーサントニ (Seine-Saint-Denis), セーヌ (Seine), マルヌ (Marne), エッソンヌ (Essonne) の 7 県によって圏域が構成されている。この圏域の総面積は 12, 008km², 総人口は 1 千万人を凌駕している。

パリおよびパリ圏では, 第一次・第二次世界大戦を通して, 常に集合・個人住宅が不足してきており, この状況は今日でも残っている。

とりわけ第二次大戦以後は, さまざまな社会的要因によって, 住宅問題の解決が都市政策の緊急重要課題のトップにあった。このフランスが, ハワードの田園都市思想の中の「都市と田園との融合化」を評価し, 1919 年のコルヌデ法によって, 人口 1 万人以上の都市に都市整備計画の策定を義務づけ, 続く 1924 年の改正コルヌデ法によって, パリの中心から半径 12 ~15km 以内に, 多くの田園都市的ともいえる住宅都市をつくってきた。

しかし, 基本的にはフランス人とイギリス人との気風や気質, 国家・官僚体制の違い等から, ハワードの思想をそっくり具現化するには至らなかった。

そこで 1973 年以降フランスは, セーヌ圏内の古くからの小さな町や村 5 箇所の地域を選定し (Fig. 17), ハワードの思想とは一味違った新しい都市づくりをはじめた。Table 1 はイル・ド・フランス地方 5 都市にかかわる諸元である ⁷⁾。

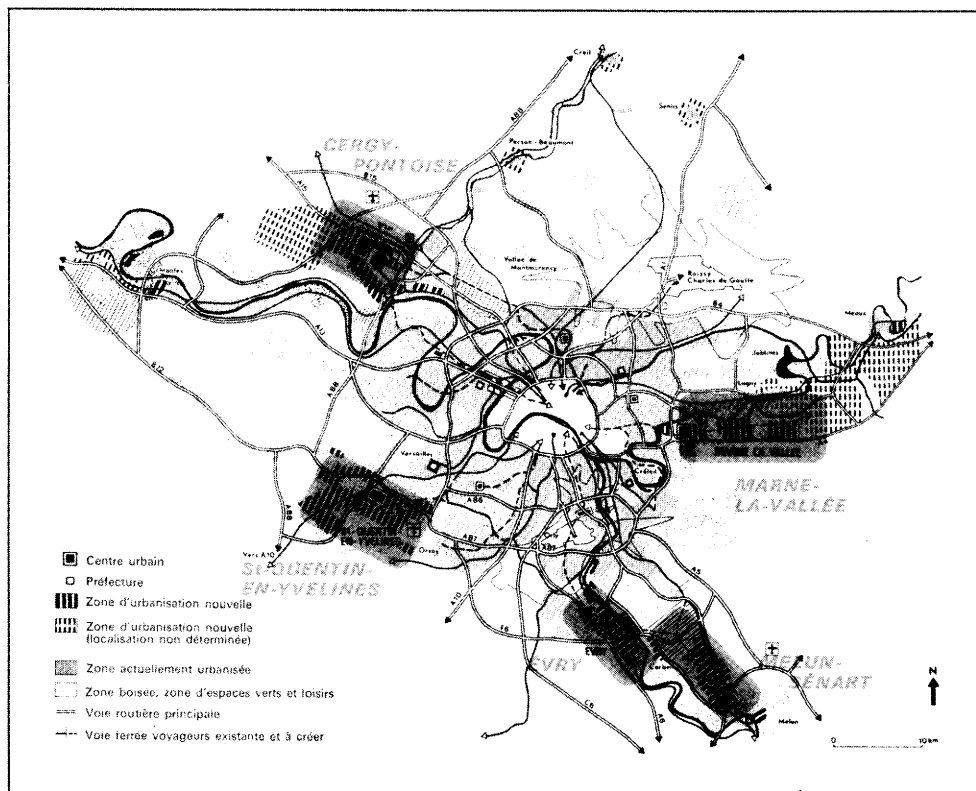


Fig.17 Politique régional des Ville nouvelle

Table 1 Dimention of 5 Sattellite Cities in Ile-de-France

新都市名	パリからの距離 (km)	町村数	1972年当時の人口 (万人)	1985年の目標人口 (万人)	備考
Evry	24	14	20	39	オルリー空港近傍
Cergy-Pontoise	25	15	6	20	ラ・デファンス地区との接続
Seine-Quentinen Yvelines	30	22	9.5	34	ベルサイユ近傍
Marne-la-Vallée	10	28	13	34	ロワッシーに近接
Melun-Sénart	35	18	8	30	—

これらの都市の開発は、高層住宅団地を主体としたもので進められるものが多く、入居者は、比較的中産階級によって占められているが、フランス人の気質にはなじめないものが少なくなかった。このため Marne-La-Vallée のように明確な地区中心を持たないままに、低層もしくは一戸建て住宅を主体としたものにつくられているところもある。筆者が 2001 年 5 月にこれらの全地区を調査した結果では、鉄道駅を中心とした地区は、高密度な高層住宅をつくり、緑やオープンスペースが少なく、アメニティに欠ける点が見られる。このことについては都市環境創造コンサルタント社長ジャン・クロード・ラリット氏への今回のインタビューでも裏付けられた (Fig. 18, Fig. 19)。

しかしこれらの地区の郊外の開発は戸建て住宅が多く、相応の整備がなされているが、余りにも広域にわたる開発であるため、鉄道駅と地区とは自動車利用に頼らざるを得ない面がある。フランスの都市開発は、可能な限り、住宅地の人間生活空間に既存の広い池や湖



Fig.18 Square of Cergy Pontoise (photographed by HORIE)

沼を採り入れると共に、人工的にも水空間を造成していることに特徴がみられる。この点は、評価されるべきものであると考える。しかし 20 世紀最後を華々しく飾ったこれらの都市整備はおおむね終焉を迎えているとみられる。

9. まとめ

ハワードが提唱した田園都市構想は、当初夢物語としか考えられなかった。しかしハワードの私利私欲のない都市づくりへの不屈の情熱に、人は次第に理解を示すこととなった。

レッチワースの田園都市づくりは土地の私有を認めず、自給自足を基本とした自己完結型ともいえるもので、すべての面において、当時としては、すべてが斬新な発想であった。事実、住宅は白色を基調としたデザインによって美しく飾り、豊富な緑空間やのびやかにカーブをする広幅員の道路、文化、芸術施設も計画にとり込んだグランドデザインを、パーカーとアンウィン2人の建築家も混えて、具体的に都市として形成化させていったことは見事であった。事実、ロンドンと比較してこのレッチワースでは肺結核死亡率が、いちじるしく少なかったことも、レッチワースが健全な都市としてつくられたことを物語っている。

ハワードの思想に賛同した世界の都市計画家達は、1913年に国際田園都市計画協会を設立したが、ハワードはその会長に選任されている。この協会はその後発展を続け、現在の「国際住宅・計画連合」(IFHP)の国際的組織に発展している。このようにハワードが播いた種は、世界の都市づくりや国際団体活動など、世界に広く輪を広げ立派に結実して今日に至っている。



Fig.19 Condominium at Creteil in the Paris Region (photographed by HORIE)

謝辞

レッチワースの研究並びに本論文作成のために、筆者がレッチワースを訪問した際、オックスフォード大学に官費留学中であった中島恵理さん(現環境省地球環境局地球温暖化対策課係長)のご協力を得た。ここに謝意を表する次第である。また本論文最終とりまとめ作業で、当大学大学院修士課程で学ぶ片野仁志君の協力を得たことも付記する。

引用文献

- 1) 東秀紀 風見正三他:「明日の田園都市」への誘い, pp. 54-55, 2001年
- 2) 先進諸国の大都市圏における田園地帯の計画思想に関する研究, p. 10, 1998年
- 3) Garden City and New Towns, p. 19, 1990
- 4) 渡辺俊一: エベネザー・ハワードと田園都市(下), 都市みらい, p. 16, 1990年
- 5) 1)に同じ p. 129
- 6) Design Guidance for residential areas in Letchworth Garden City, pp. 3-20, 2001年
- 7) La Région Parisienne en Bref, pp. 6-16

主な参考文献

- 1 Mervyn Miller, Letchworth Garden City, 1995
- 2 Courtesy of the First Garden City Heritage Museum, Letchworth-The World's First Garden City
- 3 Letchworth Garden City Corporation, Scheme of Management, 1967
- 4 Letchworth Garden City "Heritage" Foundation, Barry Parker & Raymond Unwin, 1999
- 5 Letchworth the world's first garden city, Sustaining the Garden City environment, 2000
- 6 石川幹子: ハワードの田園都市論の今日的意義(シンポジウム資料, 1999)
- 7 The New Garden City Int'l Conference 2001 Organizing Committee, New Garden City Int'l Conference 2001 Tsukuba Kobe, 2001
- 8 Angela Eserin, Welwyn Garden City, 1995
- 9 Local Authority Building Control, Planning & Building Control, (資料集)